登山月報

東京 2013 山岳競技会報告 …… 1
平成 25 年度登攀技術研修会、主任検定員養成講習会、… 4
上級指導員養成講習会報告（岩手県）
2013 年ＵＩＡＡ総会報告…… 5
平成 25 年度中高年安全登山指導者講習会 … 8
「西部地区」報告
スイス山岳会創立 150 周年記念サミット … 10
日中韓技術交流研修会…… 12
ＪＭＡ、寄贈図書、編集後記 …… 13

第68回国民体育大会
スポーツ祭東京2013山岳競技会報告

「とどけよう　スポーツの力を東北へ」を合言葉に第68回国民体育大会スポーツ祭東京2013山岳競技会が、去る10月３日～６日にかけて東京都東久留米市スポーツセンターを会場に開催された。リード競技は、スポーツセンター敷地内の屋外に設置された仮設壁で実施され、ボルダリング競技は、スポーツセンター体育館に設置された仮設壁で実施された。

平成20年の大分国体からリード競技とボルダリング競技の２種目による開催となって今年で６回目の大会となり、大会準備や運営も先催県の教訓を元に順調に行われた。また、日山協の公認資格を持ったルートセッターやクライミング審判員、競技運営員がルートセットや審判、競技役員等をするようになり、円滑な競技運営や安全対策、雨天対策等が協力して行えた。

初日の夜半から寒気が入って大気が不安定となり、夜中から雨が降り始め、２日目は終日降り続いた。そのため成年女子と成年男子のリード競技予選の中止も一時検討したほどだったが、降りしきる雨の中で何とか競技の開始時間を遅らせながら、壁やハリボテの湿気取りや濡れたホールドの交換、壁の前面にできた大きな水溜りの除去等、役員やスタッフの懸命な雨対策が功を奏し、19時過ぎに夜間照明が照らされる中で何とか予定されたリード競技を全て実施することができた。雨の中、懸命に登って頂いた選手、一日中雨に打たれながら一生懸命審査や競技運営をして頂いた審判員、競技役員、運営役員の皆さんに感謝を申し上げたい。最終日は、天候も何とか回復し、全ての決勝競技を無事に終えることができた。

今回参加された選手の中には、今年の８月にドイツのミュンヘンで行われたボルダリングワールドカップで優勝した杉本怜選手を始め、同じく８月にカナダで行われた世界ユース選手権男子ユースＡで優勝した千葉県少年男子の島谷尚季選手、同じく女子ユースＢで優勝した三重県少年女子の田嶋あいか選手など日本を代表する選手が数多く出場したため、大変ハイレベルな争いとなり、素晴らしいパフォーマンスに会場が大変盛り上がった。また、地元の小学生をはじめ、多くの方々が観戦して下さり、大変熱心に応援して頂いた。

また、平成21年の新潟国体から中学３年生が参加できる大会となり、今年も少年男子に３名、少年女子に４名の中学３年生が出場し、リード競技決勝に少年男子１名、少年女子１名が進出して、チームの成績に大きく貢献していることから、着実にジュニア層の強化が進んでいるように思われる。

今年も１チームの競技終了後すぐにボルダリング会場内のプロジェクターやリード会場の掲示板に競技が終わったチームの仮成績を発表し、リアルタイムでの１位から８位までのチーム順位がわかるようにした。

ボルダリング競技会場

途中から観戦した方にも現在の順位がわかりやすく好評であった。また、今年はユーストリームがボルダリング競技の競技映像を全世界にネット配信したので、会場に来られない人もパソコンで競技が観戦でき、非常に好評であった。会場への来場者数は延べ8,000人、ネット閲覧数は12,000人となり、世界中で約2万人が東京国体山岳競技会を観戦したことになった。

今大会から、同じ種別の選手２名の競技中ユニフォームは上下とも統一するように規則が変更となったが、全チームがしっかりと遵守していた。しかし、アイソのクローズ後に選手の競技用のユニフォームやシューズ、双眼鏡等の忘れ物に気づいたケースが数件あったので、池袋のホテル宿舎から電車で移動した今大会では対応できないことも考えられる。宿舎を出る前にしっかりと持ち物のチェックをお願いしたい。

★リード競技（Ｌ競技）について

競技時間は予選６分、決勝７分で実施されたが、雨天ということで２日目の成年女子と成年男子の予選の競技時間のみ６分から６分20秒に変更された。２日目は、競技開始が１時間遅れ、競技時間も延びたため16時20分から照明を点灯しての競技となり、競技終了は最終的に２時間遅れた。競技壁は、ＦＲＰで作られた上部が可動する左右同一形状、同一ルート（同一グレード）の仮設壁２面で行われたが、サイドエッジに足をかけてしまう選手が何人か見受けられた。競技成績に大きく影響することになるため、今後とも注意をお願いしたい。

リード競技のグレードについては以下の通り。少年男子のレベルが上がり、成年男子と少年男子のグレードがほぼ同じになった。また、少年女子のグレードが上がり、成年女子よりも少年女子の難易度が上がり、昨今のジュニア、ユース層の台頭を象徴することとなった。

予選完登者は、成年男子５名、成年女子２名、少年男子５名、少年女子５名、決勝完登者は成年女子１名、少年男子１名、少年女子１名だった。リード競技のチーム順位は、成年男子は長野県、成年女子は山口県、少年男子は埼玉県、少年女子は三重県が栄冠を勝ち取った。

★ボルダリング競技（Ｂ競技）について

競技会場である東久留米市スポーツセンターの体育館は、昨年の岐阜国体会場と同じ位の広さで、複雑な形状の仮設壁が用意され、三次元的なルート構成だったが、どの選手もよく対応していた。

リード競技会場

ここ１～２年、全国各地にクライミング施設が急激に普及して、ジムでの定期的なコンペをはじめ、身近な場所での練習環境も整いつつあり，充実したトレーニングができるようになってきたことが大きいと思われる。トップ層はハイレベルな争いであったが、少年男女については、まだ地域でのレベル差を感じるチームもあったので、さらなる育成を期待したい。

今年の東京国体から、決勝の競技方法が変更になり、昨年までの決勝進出全チームによる決勝第１ラウンド、上位４チームによる決勝第２ラウンドという方式に代わり、決勝進出全チームが決勝の全ての課題をトライして順位を決定する方式になった。決勝が単純化され、決勝進出全チームが全ての課題をトライできることで、より実力を発揮できるようになったと思われる。

競技中にテクニカルインシデントが２件発生した。１件は、運営側のタイマー作動ミスによるものであり、もう１件は小さなフットホールドの破損によるものであった。

ボルダリング競技のグレードについては以下の通り。（表の中の数字は級、初は初段。左から順に第１～第４課題を表している）。

東京国体（平成25年）

	成年男子	成年女子	少年男子	少年女子
Ｌ予選	5.13ｂ	5.12ｂ	5.13ａ/ｂ	5.12ｃ/ｄ
Ｌ決勝	5.13ｃ	5.12ｄ/13a	5.13ｃ	5.13ａ/ｂ

	成年男子	成年女子	少年男子	少年女子
Ｂ予選	2・初・1/2・1	4・2/3・3・3	2/3・1/初・2・1/2	4・2・3・2/3
Ｂ決勝	1・1/初・1・初+	3・2・3・2	1/2・初・2・初	3・1/2・2/3・2

予選課題の一撃全完登者は、成年男子８名、成年女子２名、少年男子２名、少年女子４名。決勝課題の一撃全完登者は全種別を通して０名と厳しい課題設定であった。

ボルダリング競技のチーム順位は、成年男子が愛知県、成年女子は東京都、少年男子と少年女子は埼玉県がそれぞれ１位に輝いた。

★男女総合成績、女子総合成績について

男女総合成績（天皇杯）は、地元の大声援を受けた東京都と少年男女の成長が著しい埼玉県が最後の最後まで競り合い、第62回秋田国体の秋田県、宮城県以来の同点１位となった。東京都は、天皇杯初優勝、埼玉県は埼玉国体以来２回目の１位となった。４年連続天皇杯１位を果たしていた千葉県は東京、埼玉に次いで３位となり、天皇杯５連覇はならなかった。東京都は、特に成年女子の松島由希選手と小川弥生選手がＢ競技１位、Ｌ競技４位に入賞、さらに少年女子の木暮花選手と野中生萌選手がＬ競技２位、Ｂ競技３位入賞と、まさにウーマンパワーの炸裂が東京都の天皇杯１位獲得の大きな原動力となった。また、同じく天皇杯１位を獲得した埼玉県は、少年男子の是永敬一郎選手と波田悠貴選手がＬ競技、Ｂ競技ともに１位、少年女子の尾上彩選手と坂井絢音選手がＢ競技１位、Ｌ競技も４位と、少年男女パワーが炸裂したことが素晴らしい結果につながった。

女子総合成績（皇后杯）は、成年女子、少年女子の活躍が著しかった東京都が、天皇杯とともに初の１位を獲得した。２位は、成年女子が活躍した山口県であった。

今年も都道府県予選会の報告、ブロック開催岳連が提出するブロック大会報告が、大会終了後10日以内の提出が行われていない事例が若干あった。出場選手を確定するための大切な確認資料となるため、所定の様式、所定の項目が記載された報告書を期日までに提出をお願いしたい。また、監督はブロック大会と本大会で異なった種別に参加できないため、監督の人選には十分ご注意頂きたい。また今年の東京国体から、監督は日体協公認指導員資格を取得しているか、日体協の特例措置により25年度末までに取得予定であれば参加できたが、来年の長崎国体から、日体協の特例措置はなくなった。来年度の国体に参加予定の監督の方は、25年度末までに日体協公認指導員資格の取得が義務付けられるので、必ず今年度中に資格取得を済ませて頂きたい。

今年もドーピング検査が行われ、Ｌ競技決勝の成年男子４名、成年女子２名の選手が検査対象となった。今後とも、全ての選手が検査対象候補であるという認識を選手、監督に自覚して頂き、最新のドーピング防止研修会に積極的に参加して情報を常に入手して頂きたい。

東京オリンピックの開催が７年後に決定し、惜しくもクライミングは候補種目としてノミネートされながら選ばれなかったが、今後も正式種目採用を目指していかなければならない。これからの国体は、競技の全国的な普及、少年少女の指導体制作りはもちろんであるが、将来のオリンピック競技化を視野に入れながら、競技を改革していかなければならないと思われる。その意味で各選手が、今後もより一層のレベル向上をめざして努力されることを期待する。

最後になりましたが、綿密なご準備、役員間の連携のとれた運営や素晴らしい競技施設のおかげで、無事に東京国体を終了することができました。これも地元の東久留米市実行委員会を始め、東京都山岳連盟やボランティアの皆様のご尽力があってのことだと思います。関係された皆様に心から御礼申し上げます。今後とも皆様のご多幸とご健勝、ご活躍をお祈りしております。素晴らしい大会をありがとうございました。

（競技運営委員長　高山雅夫）

第27回海外登山女性懇談会
日本の山から海外の山へ
――女性たちの海外遠征第一歩――

日時　平成25年12月3日（火）19時～21時
会場　国立オリンピック記念青少年総合センター
内容　「海外登山の楽しみ」の発表ほか座談会
「氷の道・チャダル―ザンスカール川の旅」（上村絵美）、「極北の地に見た人の営み――Mt.マッキンリー」（鈴木百合子）、「旅と未知への好奇心――海外の山に登り続けること」（恩田真砂美）
会費　500円
申込み　日山協事務局　FAX 03-3481-2395

ご参加の皆様にもれなくC3fitパフォーマンスゲイタープレゼント！
【山麓乗り入れ】キリマンジャロゆったり登頂とタランギレ国立公園サファリ 10日間
発着地 東京・大阪　旅行代金 ¥520,000～¥536,000
出発日 1/3(金)・1/20(月)・2/3(月)・2/19(水)・3/3(月)・3/14(金)
※燃油サーチャージ（2013年10月30日現在：目安約32,000円）が別途必要です。
旅行企画・実施　観光庁長官登録旅行業第490号／日本旅行業協会正会員／ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033　名古屋 ☎052-581-3211　福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

平成25年度登攀技術研修会、主任検定員養成講習会、上級指導員養成講習会報告（岩手県）

平成25年10月12日（土）～13日（日）、岩手県営運動公園クライミングウォールにおいて登攀技術研修会及び主任検定員養成講習会、上級指導員養成講習会が開催された。

前日からの雨で屋外の開催が危ぶまれたが、初日の机上講習が終わるころには、晴れあがり屋外のクライミングウォールに取りつくことができた。今回は研修４名、Ａ級主任検定４名、Ｂ級主任検定３名、上級指導員養成講習２名、講師５名、岩手県スタッフ５名の計23名での開催となった。

以下２名の受講者の感想文を掲載いたします。

■Ｂ級主任検定員養成講習会感想

（山のぼりは奥がふかい）

岩手県　菊池　眞市

一言で、Ｂ級主任検定員養成講習会の感想を述べるとすれば「山のぼりは奥がふかい」につきる。

読図が今日の課題。資料説明でまずあせる。コンパス各部の名称がでてこない。ベース、ベース矢印、度数線、リング、リング矢印、磁針。漫然と使っていたツケが、やや自信を失う。気を取り直し、磁北線を書き入れて準備完了。さっそく現地実習にでかける。

実施地は市内を一望できる岩山展望台。その脇を北西にくだる散策路を70ｍほど下り、上り返して展望台脇の三角点にもどるコース。途中の分岐で操作を交代しながらコンパス実習。進行方向の角度の読み取りに微妙なコツがある。むろん、なれるまでのコンパス使用頻度が課題。コンパス指導技術に続き、歩行技術については質問形式でなされた。いわく「段差をどう登る？」登山技術の基本中の基本。答えが浮かばない。なにげなく流してきたが大切な歩行技術。「なにげなく」をあらためて問い直す真摯な姿勢。これが「指導技術」の本質か。山は本当に奥がふかい。そして指導技術はさらにもっと先にある。その解説テキストβ版が日本山岳協会指導委員会で検討されたと聞いて安堵する。この場でなければという貴重なお話もふんだんに伺えた夕食会。とろりとしたお湯加減のききょう荘の湯船でリフレッシュ。

２日目の講習も岩山展望台。「剱岳カニの横バイを安全に下るため固定ロープをセット」、「登山者には簡易ハーネスを装着」という設定。続いてセルフレスキュー。オートブロックを７mm径60cmのスリングでセットして、 引き上げ。このオートブロックこそ一息つけるかどうかの境目。ザイルがロープへ、ロープ結びの名称も横文字に、さらにギアは日進月歩。むろん安全性の追求、さらに指導者としての責務が拍車をかけている。最新の登攀用具と技術を常に追求しなければと再認識。指導はふかく、そしてひろく、さらにそのハードルはたかい。

■ＡＣ上級指導員養成講習会感想

東京都　河地　尚志

まず、２日間の講習を終え、すばらしい講師陣、レベルの高い受講者の方々に支えられて非常に充実した時間を過ごす事ができました。

確保理論の解説では、実際の現場を意識した解説により、欠落していた知識を補うことが出来ました。特に実技を交えた説明は、飽きさせずに集中させる効果を実感致しました。

全体机上講習の後は、各講座に分かれての講習となり、Ａ級主任検定員養成講座の方々４名と合同で受講しました。上級指導員養成講習者２名中、１名の方は

補習受講でしたので実質受講者は、私一人です。上級指導員を検定する講師陣とこれから資格を取得しようとする立場、この後行われる実技、そして検定と一抹の不安がよぎります。もしかして私以外の方全員が検定員！　しかし講習が進むにつれて不安が無くなりました。さすがＡ級主任検定員養成講座に参加される方々だけあって不安な気持ち、判らず戸惑っているとジャストのタイミングで丁寧にアドバイスを下さいました。実際の山登りも、このようなメンバーと一緒に登ったらさぞかし楽しいだろうそんな思いを感じました。

制動確保、自己脱出という課題で実習、検定を受けて、自分が指導者となって何を伝えないといけないのか改めて考えるきっかけを頂きました。一連の作業、ノウハウについて伝えるのは言うまでもないが、バックグラウンドには、様々な状況、今持っている自身の能力をシミュレーションし、知恵を絞り危険を回避するということにあったのではないかと思います。今回お世話になった講師、関係の方々、一緒に受講頂き多くの温かいアドバイスをくれた先輩方ありがとうございました。私にとってAC上級指導員の養成講習会は、まだ始まったばかりですが、この経験を糧に成長出来るように頑張ります。

2013年ＵＩＡＡ総会報告

開催国・団体　：スイス山岳会
日　時　：2013年10月５日
参　加　：八木原副会長、小野寺（記録）

通常は総会時には理事会も開催されるのであるが、理事メンバーである神﨑会長が国体のため参加出来ず、総会のみの出席となる。また、スイス山岳会創立150周年を記念しての開催であり、総会の前日にパネル討論会が開催されたが、それは別途報告となる。この総会終了後に副会長のPeter Farkasがいみじくもスムーズに行き過ぎて却ってあとが恐いと言っていたが、まさに波乱のない総会であった。

１．会長挨拶等

「山は偉大なスポーツ」との会長の挨拶の後、定足数の確認（今回の実際に出席した人は50人足らずで少ない）、さらにチリ出身の理事が２回続けて理事会に出席しなかったことにより空席となったことの発表があった。

２．今回の議題の承認、投票にて承認となる。

３．前回の議事録、投票にて承認となる。

４．会長レポート、最近の動きの全般について事前にレポートが配布されていた。特に問題なしとなる。

５．事務所からの報告として、前のマネージャのGurdeepakに代わり11/1からFlorianが新マネージャ、StephanieがCoordinatorとして新規採用されたことが発表された。

６．マーケティングとコミュニケーションスポンサーの件、現在Grivell,BACH1,TNF（The North Face）であり特にＴＮＦはアイスクライミングに230,000CHFを寄付、ＵＩＡＡ全体の30%に相当する。又、ＢＭＷ、SUUNTO、SIGG+にはアプローチ中であるとのこと。新しいスポンサーとしてアジア、南米、アフリカなどに探しているとのこと。コミュニケーションに関して言うと今のWebでは限界に達しており、2014年から新しいWebがスタートするとのこと。

７．経理報告

2013年は順調に推移している。2014年の予算は収入が668,000CHF、支出が662,000CHFで特に後述するドイツ山岳会、オーストリア山岳会の再入会によるところが大きい。

８．メンバーシップ

前述の様にドイツ山岳会（100万人会員）、オーストリア山岳会（60万人）が復帰し、夫々あいさつした。バングラデシュ（33人）も入会の許可が出た。33人で大丈夫か、との意見も出されたが、Frits会長がわざわざ訪問して話をしたので、大丈夫とのこと。さらに新規ヨルダンは観察会員（Observation member）となった。

今年度会費未納の国（団体）は以下の通りである。

チリ（FEACH）、キプロス（KOMOAA）、ハンガリー（MSTSZ）、インド（IMF、すぐに支払うとのこと）、コソボ（KMAF）、ペルー（CAP）、トルコ（TDF、2年滞納）、モンゴル（MNF）であり、年末までに支払うよう催促しているとのこと。また分割払いはグルジア（MCAG）、ルクセンブルク（FLERA）、ポルトガル（FPME）である。

9．小団体を保留・引き込むための戦略WG（Working Group）の報告

今年の5月に小団体については或る条件で期間を区切って資金援助することが決まりＷＧが作られたが、その報告がAnne Arranからなされた。基準も作成された。対象1号はアゼルバイジャンになり、この国がお礼の挨拶をした。2分にしてほしいと言うのに用意した原稿で5分も話し続けた。トルコには援助しないとのこと。

10．2014Sochiについて

ＩＯＣとはうまくいっている。ＵＩＡＡポリシーとしてon boarding（互いに理解しあいながら）新しい将来を見極めて行きたい、公的利益を追求して行きたいとのこと。別の話としてＩＦＳＣ、ＩＳＭＦとも共同することを考えている。

＊ 議題にはなかったが、自然保護委員長のLinda McMillanが昨日の簡単な報告を行い、Ang Tsheringがこの件に関し、追加で意見発表を行った。インド／ＩＭＦは今年7月から8月にかけて行った事業について説明、レスキューや自然保護も取り入れており、来年も行うので是非来てほしいと宣伝した。パキスタン／ＡＣＰはナンガ・パルバットの事故の状況について説明、如何に安全を優先したかを強調した。

11．各委員会報告

ポイントのみを記す。

「アクセス＆遠征委員会」、コマーシャル登山の新ガイドを作成予定とのこと。ＡＣＰが質問、是非ほしいので早めにほしい、いつごろ出来るかの問いに、始まったばかりでこれから計画を立てるとのこと。

「登山委員会」、技術ハンドブックの英語版1版（フランス語版は既に2版）を出版した。Petzlが資金提供し、フランス山岳会とカナダ山岳会が作成した。今のところは各団体に1冊とのこと。Aruga Project（8,000m峰は14座ではなく20座）については進行中でネパール、パキスタン、中国、インドにて相談中とのこと。

「アイスクライミング委員会」、2014Sochiのデモはロシア山岳会が主管で行う、20ヵ国40名が参加とのこと。他ツアー日程についてはWeb参照のこと。

12．新ＭＣ（Management Committee）メンバー、コートメンバー発表及び名誉会員選出

ＭＣの北米はカナダのPeter Muir会長、アフリカは南アのPetronella Elizabeth Grobler会長、オセアニアはニュージーランドのStuart Anthony Gray会長が夫々就任した。チリは各地域ではなくその他で選出されていたのであるが、今回は空きのままとなる。ＵＩＡＡコートは訴訟に係ることを担当するが2007年に設置されていた。今回は2名が新たに選出された。共に弁護士であり、以前は登山委員会の法律WGに所属していた。名誉会員はフランス（ＦＦＣＡＭ）のClaude Eckhardt氏が選出された。この方は夫人が日本語を勉強しており、選出後の檀上での挨拶の時に日本語の発音で「ありがとう」とも言ってくれた。

13．次回開催場所

2014年春の理事会は未定、総会はチリが突然（2,3週間前）辞退し、場所を探しあぐねていたが、アメリカ（ＡＡＣ）がこの日に立候補した。ビデオでの場所紹介も準備してきた。Lowell Putnamが紹介した。アリゾナFlagstaffとのこと。すぐに承認された。因みに2015年総会は各国が立候補した。

その他、Doug Scottが自分の撮影した写真（75年エベレスト、Dougal Hastob）/ボニントンやメスナーのサイン入りを競売にかけ、2,000CHFでSwedenが落札、売り上げはナンガ・パルバットで殺害されたシェルパの遺児に寄付された。　以上

記念サミットのまとめをするFrank Mullerスイス山岳会前会長

第60回 Mountain World

アンナプルナ南壁ダイレクト・ソロ

池田常道

アンナプルナ（8091m）の南壁は、クリス・ボニントンの英国隊が1970年に初登攀して「ヒマラヤ・壁の時代」到来を告げたものとして、登山史上に確固たる位置を占めている。1981年春に右手のバットレスがリシャルド・シャフィルスキ隊長のポーランド隊によって中央峰まで登られ、同年秋には、吉野寛隊長のイエティ同人隊が中央バットレスを完登して主峰に登頂した。84年には、スペインのニル・ボイガスとエンリク・ルカスが、ポーランド稜の右手に断続する氷雪部をつないで、アルパイン・スタイルの登攀に成功した。

スロヴェニアのネイツ・ザプロトニクは、英国ルートとイエティ・ルートにはさまれたクーロワールに目を付け、1983年秋の遠征を企画した。ところが彼は、その春に出かけたマナスルで雪崩に呑まれ、代わりの隊長はアンドレイ・シュトレムフェリが務めたものの準備不足は否めず、6400mまでしか登れなかった。

フランスのピエール・ベジャンとジャン＝クリストフ・ラファイユは1992年秋、アルパイン・スタイルでこのルートに向かった。ビバーク3回でロックバンドを抜け出し、7400mまで迫るが、天候が悪化したためいったん退却を決めた。ところが、300mも下ったときに懸垂下降のアンカーがはずれ、ベジャンがロープもろとも転落してしまった。残されたラファイユは20mの補助ロープを使って4日目に生還した。

その後このルートには、1994年にスラブコ・スヴェティチッチ、95年にラファイユが挑んだが失敗。2011年には韓国のパク・ヤンソクが行方不明となっている。

＊

スイスのウエリ・シュテックは、2007年にここを単独で狙ったが、落石を受けて300mも落ち、九死に一生を得た。翌年はジーモン・アンタマッテンと二人で挑んだものの、東稜で起きたイニャキ・オチョアの遭難救助で機会を逸した。この２回は春だったが、今回の挑戦には秋を選んだ。４月のエヴェレストでシェルパたちから暴行を受け、登山を諦めるという忌まわしい経験（５月号本欄参照）を忘れるためにもモチベーションは高まった。同行するのはカナダのドン・ボーウィ。東稜遭難救助にかかわっていたのでシュテックとは旧知の間柄だった。しかし、彼は2500mを超える壁をフリーソロする自信がなく、取付きで断念することを告げた。

10月８日、シュテックは独り南壁の登攀を開始した。5000mのABCを出たのが朝５時半。順応時6100mにデポした装備のうちからテントとガスカートリッジを補給して6600mまで進むが、強風とチリ雪崩から逃れる場所が見つからないので、100m戻ったクレバス内でビバークした。ここで十分に飲み食いするうち日が暮れ、風も治まってきた。この静穏を最大限利用するべく夜間登攀を決意し、１時間後に再開した。

壁の傾斜は懸念したほどのことはなく、ときおり現れる垂直の段差を越えていくだけ。7000mを過ぎても登攀スピードは落ちなかった。ヘッドウォール基部でカメラに収めておいた画像を確認していたとき突然チリ雪崩を浴び、羽毛ミトン片方とカメラを失った。厚手の手袋だけでは指先が冷えるが、寒さを感じるたびに残ったミトンを交互にはめては登り続けた。頂上に立ったのは夜明け前だったという。高度計の数値をたしかめ、周囲の地形を確認すると5分ほどで踵を返した。ABCでボーウィや撮影隊の面々に出迎えられたのは、出発後28時間たってからだった。

フランスのヤニック・グラジアーニとステファヌ・ブノワはシュテックと登山許可を共有していたが、先に攻撃するというテキスト・メッセージを順応行動中に受け取った。二人は10月17日に取付き、シュテックのそれより安全なライン（ベジャンとラファイユの試みたルートで、彼らは2010年に一度試登していた）を採った。6100mでビバークし、イエティ・ルートの6650mで２晩を過ごし、その後もビバークを繰り返した末、24日頂上に立った。下降には2日間かかり、消耗し尽くした二人はABCからヘリで救出された。

アンナプルナ南壁、フランス・ペアの登攀ルート。シュテックは下部をもっとダイレクトに登った。

平成25年度中高年安全登山指導者講習会　「西部地区」報告

日　時　平成25年10月11日（金）～10月13日（日）

会　場　阿蘇市、阿蘇郡高森町及び南阿蘇村　阿蘇山
（開閉講式・宿泊場所：休暇村南阿蘇(熊本県阿蘇郡高森町)

主　催　独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所、公益社団法人日本山岳協会

共　催　熊本県教育委員会

後　援　文部科学省

主　管　熊本県山岳連盟

参加者　受講者48名、主催者４名、共催者１名、講義講師３名、分科会座長３名、分科会助言者３名、実技講師14名、看護師１名

【準　備】

平成24年12月６日に本講習会の主管依頼が通知され、平成25年１月21日に岸記念体育館103号会議室で本講習会の「連絡会議」が開催された。絞ったテーマで２～３年続けて、安全登山のために実効ある啓発を各地で目指すこととなり、「道迷い防止」に関係するテーマが提案され、合意された。

そこで西部地区では、第１日目の講義にナビゲーション技術と阿蘇火山の講義、第２日目はナビゲーションの実技、第３日目は気象遭難・登山計画・中高年登山の課題をテーマで協議することにした。実技講師は、熊本県山岳連盟に所属する山岳会の日本体育協会公認上級指導員をコアとした。本年９月８日に県内役員を集めて、予定コースの阿蘇中岳及び高岳周辺を踏査をしたものの、９月25日15時40分、福岡管区気象台が阿蘇山に火口周辺警報（噴火警戒レベル２、火口周辺１km規制）を発表し、予定していたルートが使用できなくなるおそれが出てきた。（※結果的には、開講式当日の10月11日11時00分に規制が解除されたが、翌12日に再び規制されることとなる。）

９月27日の熊本県山岳連盟準備委員会において、予備ルートが検討され、烏帽子岳及び杵島岳を周回するルートを予備ルートの候補とした。10月５日及び６日に県内役員を集めて、予備ルートの踏査及び整備を行い、10月７日に休暇村南阿蘇と打ち合わせを行った。

10月９日の夜、県内役員及び看護師を熊本市内に集めて、講習会当日の流れについて確認した。また、当日、火口周辺規制が解除されたとしても、中岳・高岳へのルートは使用せず、烏帽子岳及び杵島岳を周回する予備ルートを使用することを決定した。

【１日目】

開講式　主催者の国立登山研修所所長渡邉雄二氏と日本山岳協会会長神﨑忠男氏、共催者の熊本県教育委員会体育保健課長平田浩一氏からの挨拶、主管の熊本岳連会長工藤文昭が歓迎の辞を述べた。

講義Ⅰ「道迷い防止のためのナビゲーションの考え方」

講　師　北村憲彦氏（名古屋工業大学教授、工学博士、国立登山研修所専門調査委員会委員長）

中高年遭難事故の実態として、道迷い事故が一番多く、60代で特に多いことを示した。

登山は計画書作成から始まっており、不十分なルートプランには道迷いのリスクを内在していることも解説された。この対策として、ルートプラン・ルート維持・現在地の把握のサイクルを回すことが重要であることが強調された。具体的な事例を挙げて、パワーポイントと配布された地形図を組み合わせ、理解を促す内容であった。

講義Ⅱ「登山計画とナビゲーション技術の実際」

講　師　小林亘氏（日本プロガイド協会所属、国立登山研修所専門調査員）

道迷防止には、(1) 登山計画段階から地形図で検討、(2) 現在地を把握し続けることが安心につながり、事故防止に効果があること、(3) 予測した地点に正しく着いた時の嬉しさも登山に加えようと提案された。

次にナビゲーションに不可欠な読図の基本から応用が説明された。配布された「お稽古帳」を使い、地形図上の等高線や記号の意味、磁北線の引き方、等高線から傾斜の想像、等高線から尾根や谷を区別、コンパスの使い方を演習した。不慣れな人にも分かりやすく、伝達しやすい講義であった。また、地図の読み違え、ルートの思い込み、局所の方向判断の違い、頂上での方向確認ミスも例示され、阿蘇山での実技地図も例に

読図した。

講義Ⅲ「阿蘇火山の概要と安全登山について」

講　師　渡邉一徳氏（熊本大学名誉教授、理学博士、阿蘇火山博物館学術顧問）

（1）火山学の基礎、（2）阿蘇カルデラと火砕流噴火、（3）根子岳火山、（4）火口原（カルデラ床）の地質、（5）中央火口丘群の地質、（6）中岳の活動、（7）火山の調査や火山特有の事故、（8）火山研究と破局噴火について講義された。

特に、火山登山の注意点として、節理面で剥がれ落ちる、礫状の堆積物では礫が外れる、足場が悪い、少雨でも土石流発生の危険、噴煙の真下を避ける、噴気地帯では低所や谷に注意、などの解説があった。

【２日目】

実技研修

8時20分	宿泊所をバスで出発。
8時50分	スタート地点（草千里展望所）着。
10時30分頃	烏帽子岳山頂。
12時頃	杵島岳中腹1,224mピークの展望所にて昼食及び救急搬送実習
14時30分頃	杵島岳山頂。集合写真を撮影。
15時20分頃	草千里レストハウス着。バス乗車。
16時頃	宿泊所に到着。終始好天の一日。
18時30分	情報交換会にて、各自意見の発表。
21時00分	情報交換会終了。

（班ごとに順番に到達したので、標準時間を記載）

コース上にポイントを16地点設定し、地図に表現された特徴と現地の地形との対応を確認していった。具体的には、コース上の三角点を２か所で確認。鞍部、ピーク、コースの尾根と枝尾根の分岐点、尾根の幅の変化、コースの傾斜の変化、登山道の分岐、隣の尾根の形状等を観察し、現在地点を推定した。

また、スタート地点、烏帽子岳山頂及び杵島岳火口縁では、実技講師から、阿蘇の神話や、火山地形の成り立ち、阿蘇の草原の維持に関する講話を伺った。さらに、昼食時には、ツェルトを使用した簡易担架作成や、ハーネスとスリングによる背負い搬送の実演を行った。

当日は好天に恵まれ、雲仙、祖母、九重連山等、九州の山々が遠望できた。

情報交換会では、受講者が講習への参加動機や講義・実技の感想などを簡潔に発表し、交流も深めた。

【３日目】

研究協議会（分科会）

第１分科会「気象遭難の身近な事例と防止策について」

座　長　佐藤敏雄氏（熊本県山岳連盟副会長）

助言者　山田敏秋氏（熊本県山岳連盟）

（1）判断力の養成、（2）装備の活用、（3）ヘリコプターの要請、（4）中高年の登山に対する認識 等について忌憚のない意見が交換された。

第２分科会「安全登山のための登山計画の立て方について」

座　長　江藤克洋氏（熊本県山岳連盟）

助言者　坂田優人氏（熊本県山岳連盟）

参加者が実際に利用している登山計画書が13本提出され、その中から参加者３名と座長作成の計画書の計４本について説明があった。年間計画から参加者が自分の能力に合致した山を選び安全性を高める。必要十分な情報をシンプルでわかりやすく、また、それを簡単に確認またはチェックできる計画書について議論された。

第３分科会「中高年登山の問題点と指導について」

座　長　工藤文昭氏（熊本県山岳連盟会長）

助言者　吉本一喜氏（熊本県山岳連盟）

事故につながらない山行について議論が交わされた。（1）リーダー・指導者の育成、（2）山岳会に所属しない登山者対応、（3）日常生活の中でのトレーニング 等話は尽きなかった。

全体会

各分科会の座長が討議の要点を報告した。

閉講式

国立登山研修所所長渡邉雄二氏より受講者代表の山崎裕晶氏（岡山県）に修了証が授与された。日本山岳協会普及担当常務理事仙石富英氏の講評、主管の熊本県山岳連盟会長工藤文昭がお礼の挨拶を述べ、予定の日程を終了した。

全ての参加者やスタッフのご協力のお陰で無事に講習会が終了いたしましたこと、深く感謝申し上げます。また、熊本の山においでいただくことを心よりお待ちしております。

（熊本県山岳連盟理事長　西本安幸）

スイス山岳会創立150周年記念サミット
登山の将来に向って――山岳団体/組織における挑戦――

2013年のＵＩＡＡ総会はスイス山岳会（ＳＡＣ）創立150年を記念する形で、スイスPontresinaにて開催され、ＳＡＣではサミットと銘打ってパネル討論会を開催した。テーマは「将来における登山」、サブテーマとして「山岳団体／組織における挑戦」である。登山における将来像として、フリーアクセス、気候変動、そして山岳環境における自然保護が密接に関連している。このような問題に対し、我々は将来どのように実際的・実践的に対処できるだろうか？　この機会に国際的に著名な登山家、科学者、組織の代表者が集り山岳団体における挑戦、解決へのアプローチについて討論を行った。目的は山岳団体の任務に話し合われた結果を取り入れる、と言う試みである。つまり難しいルートを登る、と言う視点ではなく、どのように山と向き合うかがメインテーマとなっている。

司会はドイツの山岳専門誌「BergSteiger」編集長のMichael Ruhland氏、最後の取り纏めはSACの前会長のFrank-Urs Muller氏である。

(1) 基調講演：将来における山岳及び山岳スポーツ
ー現状と動向/流れ
D.Siegrist氏（NGOアルプス保全委員会会長）

地球温暖化による温室効果ガスについては20世紀後半から特に顕著な問題になってきた。科学的研究もおこなわれており、又、山に対するフリーアクセスにも影響を及ぼしている。徐々に表面が解け始め2000年には全く消滅した氷河もある。キリマンジャロは8%も雪が減少した。氷河変化において落石が増え、クレバスが変化している。コンコルディアなどにもそれは見られる。モンテローザなども深刻だ。元の道を確保しようとしてもコストがかかる。氷河湖が各地に出来、洪水は２kmにも及びインドではインフラにも影響している。国連も2002年以降調査を行っている。

スポーツクライミングも普及し、大会も盛んだ。ドイツ山岳会などは百万人も組織化しアウトドア装備も増加、年間５千万人もハイキング、スキー等を楽しんでいる。登山者の90%が車で山に行く。他の国も同じだろう。モンブランにも沢山の人が登っている。スイスは自然保護がうまくいっている。

エベレストについては、初登頂後の最初の30年の登頂者数と今では大変な違いだ。今や１日に150人も登っている。コマーシャル登山が主で安いものは$2000からあるらしい。チョモランマのBCにホテルがあると聞く、これはよくない。シェルパとの乱闘についてはヨーロッパでは大々的に報じられた。シェルパに敬意を払っていないのではないか、お互いに尊敬していないのではないか。この事件のインパクトは相当なものだった。6/23にはタリバンによる事件も発生、10人の登山家が亡くなった。これらは並行して起こっている。山はユニバーサルに変化している、十分に注意して発展させなくてはならない。映画などでも登山は夢を与え、遭難もあるが、多くの人が山の良さをほめている。スポーツクライミングも一役かっている。気候変動の事、金銭的責任のこと、たとえばドイツ山岳会も100万人夫々の歴史がある。厳しい意見もあると思う。以上であった。そして以下のパネルディスカッションが行われた。

(2) セッション1.テーマ：気候変動と登山ー山岳団体の責任、責任はどこにあるだろうか？　以下の方々で討論された。
K.Conradin(スイスMountain Wilderness理事)、F.Jaquet(ＳＡＣ会長)、H. Oberrauch（Salewa CEOイタリア)、M.Price(Highlands & Islands大学山岳研究センター教授)、M.Soin(IBEX Expeditions India)、P.Rieder(King Albert Memorial Foundation会長)

二酸化炭素などの問題に関して、ドイツでは90%、スイスでは79%が車で山に行く、制限すべきか、法律を作るか、バスなどの公共輸送、１台に大勢乗るなどしたらどうか？　いや、全ての人が同じ条件ではない、Websiteにタクシーを案内したらどうか、この場合、インフラの整備が必要となる。多くの組織が関わることになる、政府の援助が必要になる、キャンペーンは必要か、組織的な教育は可能か、電気自動車を走らせたらどうか、など、結局モラルの問題、ということになる。しかし気候変動の視点からすると、金銭的サポートも必要となるし、新しい技術の誕生も欠かせない。

別の解決方法を考えてみたらどうか、ソフトツーリズムという考え方かある。例えばインド、ネパール、チリなどであるが、これらの環境をポジティブに受け入れるのである。自分で歩き、或いは馬を使い、自然そのままの環境を受け入れ、そして楽しむ。キリマンジャロにケーブルカーはクレージーだろう。つまり可能な限りこれらの環境を残す、ということである。プロジェクトを作って実践したらどうか。

気候変動については受け入れるしか手はない。従来の危険なルートの変更、禁止、新しいルートの開拓などリスクは受け入れるしかない、今よりもっと厳しくなるだろうしこれらについての教育はスイス山岳会の義務である。

セッション2.フリーアクセス---山岳団体の選択、以下の方々によって討論された。

R.Bosc(山岳写真家・スイス),L.McMillan(UIAA自然保護委員長),U.Schupbach(SAC環境担当理事),T.Walther(登山家・スイス)

自然環境保護とツーリズムは討論しなくてはならない重要なポイントであり、公共輸送は賛成であるが、そのリアクションも考えなくてはならない。ケーブルカーは自然環境を壊す、もっと新しい設備を作らなくてはいけない。スイスアルプスには多くのインフラがあり、今後どのよう促進していくか、ケースバイケースで考えていく必要がある。イベントツーリズム、イベントアドベンチャーなどまだ未着手の地域に新しい施設、新ゴンドラなどを設置し自然保護とのバランスを保つことはＳＡＣのフリーアクセスの問題である。国立公園と自然保護について、スイスでは国立公園に犬は入れない、科学者による保護地域がある。まだ手を付けられていない地域に、文化的価値とのバランスを持った新施設の作成をトライしてみたらよいかも知れない。ヘリスキーについても言及があった。

エベレストにおける件については何点か議論の対象となった。シェルパとの乱闘について及びヒラリーステップの梯子についてであるが、後者はネパール関係者が梯子を固定しておくつもりらしい、という発言、また公募登山についても複雑な問題であることは分かっているが、反対する発言が続いた。この討論はヨーロッパで行われており、この議論だけでなく、他の内容についても当然視点はヨーロッパの登山者・登山家になることが多い。話は前後するが、会場にいたアンツェリン氏は発言を求めたが聞き入れてもらえなかった。この聞き入れてもらえなかった事自体も含めてであるが、翌日のＵＩＡＡの総会に時間をもらって苦渋した顔で意見を述べている。乱闘については双方が過ちを認めているということ、ネパールは梯子の固定化は考えていない、ということ、公募登山についても、登山は先進国からするとスポーツの１つとして捉えられているが、低開発国にとっては生活の糧であること、を訴えていた。乱闘については、一方の当事者にはスイスの登山家が含まれていることは皆知っているが、この場においてはシェルパに敬意を払いましょう、ということになった。

(3) セッション3は上記、1と2を総合したものであった。

討論に先立ち講演が行われた。講演者はこのサミットにも関係しているKing Albert記念財団の前会長でベルン大学教授のB.Messerli氏である。内容については気候変動、温暖化の問題について科学的視点から発表した。20世紀になって人口が４倍に増え、経済は５倍も早くなった。インドと中国の人口の合計は３０億人である。ヒマラヤからインド洋に流れる水量については残念ながらデータがない。水やエネルギーがクリチカルポイントになり、また政治が絡むが世界中の国々と協力してデータを集め国際的に運用する必要がある、私が知りたいことにどの程度の金と時間がかかるか、考えると腹立たしいなどとした。その後最初の講演者であるD. Siegrist氏と討論が行われた。内容的には１と２を踏襲したものであるが、アルプスとヒマラヤでは条件が違うことを踏まえて、古い国立公園ではなく、新たに国立公園を作り、フリーアクセスのモデルを考えたらどうか、インドとツーリズムの契約を結び、実践も可能であるし、一緒に機会を設けて相互互恵の関係を築きながらソフト的な方法で将来を共有したらどうか、などと話し合われた。

(4) まとめはFrank Mullerによって行われた。

彼は私の知っている範囲では、自分の意見を毅然とした態度で言う男である。「８年間スイス山岳会の会長を務めたが、難しさもあった。ナーバスになり過ぎないようにしたい」とした上で議論を次のよう纏めた。

人と自然を見ながら相手に対し敬意を抱き、責任を持つこと、気候変動に左右されない実践的登山を行うこと（技術を磨くこと）、山への影響を減らす様に個人個人で責任を負う（車使用など）こと、山岳地域における成長と限界を見極めること、自分自身の「エベレスト」を発見し、楽しむこと、人は手つかずの自然（wild place）を必要としていることを理解し、自然を守るために行動すること、謙虚な気持ちで登山を楽しむこと。UIAAとその仲間たちはどのようにして以上のChallengeに対して答えられるか、が重要である。

最後に、スイス山岳会は公募登山とは手を組まない、と強調した。

（記　小野寺　斉）

日中韓技術交流研修会

期　　日　2013年9月13日～20日
開催場所　中国青海省西寧・Mt. Gangshika
参 加 者　町田幸男、一本松文夫（以上日山協遭対常任委員）、角田守、毛呂憲治（以上群馬岳連救助隊）

このイベントも今回で４回目となり、中国開催は２回目である。ただ、前回（平成22年度）は都合により日本は参加しておらず、中国での開催に参加するのは初めてである。日本からの参加者は４名で、今回は群馬より若手２名を参加させた。西内委員長が都合により欠席のため、町田が団長を務めた。韓国からは11名が参加。メンバーは全国のレスキュー隊からの選抜で12日より中国入りしたようだ。中国はスタッフを含め総勢25名が対応していたらしいが、常に一緒に行動していたのは3名であった。通訳は今回も日本語、韓国語を巧みに操る中国の李さんが務めてくれた。

●９月13日（金）

関東組は羽田、関西の一本松さんは関空より出発して北京にて合流。飛行機を乗り継ぎ予定通り21時に青海省の首都西寧に到着した。中国登山協会の出迎えで空港よりワゴン車でホテルまで送っていただいた。本来は夕方より歓迎会が開催されたのだが、フライトの都合がつかず日本隊は遠慮することとなった。ホテルでは通訳の李さんほか中国隊２名と、韓国隊のリーダー、事務局員の２名が出迎えてくれ、ささやかな歓迎会を開いてくれた。

●9月14日（土）

ホテル向かいの食堂で朝からラーメンをいただき、マイクロバスに同乗して全員で青海湖へ向かう。今日は１日観光の予定である。標高約2,300mの西寧から標高約3,200mの青海湖までは高速道路を使い、２時間半で到着。湖とはいえ対岸は見えず、海のような広さの塩湖である。明日からの高所に備えた順化目的で連れて来てくれたのかも知れないが、15分ほどしか滞在せずマイクロバスで引き返す。途中で昼食をとり、次の目的地、タール寺へと向かう。タール寺は中国にある４つのラマ教寺院のうちの一つらしい。いくつもの礼拝堂が点在した立派な寺院で、多くの観光客でにぎわっていた。夜は青海省登山協会の副主任が同席し、四川料理をご馳走になった。

●9月15日（日）

朝食後、荷物をトラックに積み雨の中をマイクロバスでMt. Gangshikaのベースキャンプ（4,200m）に向かう。中国人はこの山を「ガンシュカ」と発音していた。途中3,800mの峠を越え、小さな町で昼食を取る。3,700mでバスを降り、徒歩でベースキャンプまで２時間半かけて登る。荷物は馬で運搬してもらったが、何の順応もしていない日本隊には流石にこたえた。夜はプロジェクターを使い、中国隊による雪崩に関する発表が行われたが、ベースとなる資料は欧米のもので良く目にする内容であった。

●9月16日（月）～18日（水）

ベースキャンプでの３泊４日のテント生活が開始。さまざまなイベントが行われた。4,600m付近の雪の斜面まで高所順化を兼ねたハイキング゛や、ビーコンと竹竿を使っての雪崩捜索のデモ。アンザイレンで行動中、クレバスへ落下した場合への対応や、ガモフバッグ゛のデモが行われたがどれも既知の技術であり、真新しいものは無かった。ビーコンにあっては、まだトラッカーのシングルアンテナを使用していた。クレバスからの救出では韓国隊にヨーロッパでガイド゛の技術を習得した方がいて、大変熱心に技術を披露してくれた。ただ、1/3の引き上げにムンターを使用していたり、テンションがかかった状態ではかなり無理がある設定も見受けられた。日本隊は持参したリボルバーやマイクロトラクションを使用しての引き上げデモを

青海湖

ベース・キャンプ

行ったところ、中国、韓国とも大変興味を示していた。最も関心を引いたのはガモフバッグのデモであった。日本、韓国各１名が実際に中に入り圧力変化を体験した。日本からは最も具合の悪そうだった毛呂が体験、2,700mまで加圧してもらった。バッグは急激な圧力変化をもたらすため取り扱いには十分注意が必要である。特に鼓膜へのダメージが顕著なようだ。しかしながら、実際に4,200mでの使用体験が出来た事は大変良い経験になったと思う。

夜は３国それぞれの登山および遭難に関する現状について発表した。韓国の内容は昨年とほぼ同様で目新しいものは無かったが、年間の山岳事故件数が１万件は驚きである。中国からはハイキング、クライミング、高所登山に関する教本を作成し一部の大学では専門の授業が行われているとの発表があった。日本からは毛呂が日本における登山の歴史について発表した。また、５月の白馬における雪崩事故についてと、青山副委員長よりいただいた昨年度の遭難統計をベースに減遭難への取り組みについて町田が発表した。韓国からは遭難の態様や詳細データをどのように取得しているのか等の質問を受けた。彼らも減遭難に対する取り組み姿勢に感銘を受けていたようである。

●９月19日（木）

朝食を済ませ９時にベースキャンプを後にする。高所での辛さと八角の香り高い料理からやっと開放される。下りは１時間ほどでバスまで到着、来る時に寄った同じ町の同じ店で昼食を取る。中国のドライバーは狭い道でも平気で飛ばし、クラクションを良く鳴らす。おかげでうとうとしてもすぐに起こされてしまう。土砂崩れがあったらしく迂回路を通って西寧に17時到着。

夜は青海省体育協会の施設に招待され晩餐会が開催された。この施設は日本のマラソンランナーもトレーニングで良く使用するらしい。席には同施設の副主任女史と青海省登山協会の主任が同席し、楽しいひと時を過ごした。

●９月20日（金）

８時にホテルを出発、登山協会の車で空港まで送っていただいた。北京までは李さん他１名が同乗した。フライトは順調でその日のうちに全員無事帰国した。

昨年の韓国に続き、今年中国での開催を経験したが両国とも歓迎の気持ちが大変強く、盛大なもてなしようであった。日本の遭難対策技術向上と言った観点で見ると、このイベントの目的がいまいち不透明ではあるが、３国の今後の友好を考えると登山事情や遭難対策技術の交流は必要と思われる。来年度は日本での開催を予定しているが、早めに準備し、失礼のない対応をし、参加する価値あるものにしたいものである。日本開催なので遭難対策関係者をはじめ是非とも多くの若い方々の参加をお願いしたい。　**（記　町田幸男）**

JMA 平成25年度10月（25年10月）常務理事会報告

日　時　平成25年10月９日（水）
17：30～20：20
場　所　岸記念体育会館103会議室
出席者　神﨑会長、八木原・國松・佐藤副会長、尾形専務理事、小野寺、西内、森下、京オ、水島、瀧本、青木各常務理事、中畠監事
欠　席　仙石常務理事
（13名中12名出席）

1．専門委員会動静

９月常務理事会以降
（９月13日～10月８日）

［報　告］

⑴国際委員会
９月18日㈬　出席者８名

ア　平成26年度国際委員総会について
・6/14～15、長野県山岳総合センター

イ　ＢＭＣ国際クライマーズミーティングの派遣について
・中島健郎、今井健司を派遣

ウ　ＷＣＭ 2013について
・スロベニアからゲストクライマー来日

エ　第26回海外登山女性懇談会について
・開催期日の変更の件（12/3に変更）
・講師とテーマ（上村絵美、恩田真砂美、鈴木百合子）について

ウ　次年度からの国際委員会事業について
・海外登山女性懇談会の見直しについて
・海外登山奨励金制度の見直しについて

⑵競技部合同委員会
９月19日㈭　出席者16名

ア　平成25年度上期事業決算書及び平成26年度事業計画と予算案の作成について

イ　選手登録の改定について
・都道府県大会からの登録費の徴収、徴収範囲、実施時期について
・平成26年度からの高校生の選手登録について

ウ　ブロック研修会の開催方法について

エ　2014　IFSC クライミングワールドカップ印西大会について
・第１回会議報告（9/19）

オ　第69回国体（長崎）における監督の資格特例措置の取り扱いについて
・今年度の特例措置を来年度も継続

カ　国体山岳競技規則集の一部改訂について

キ　ルートセッターの認定について

ク　９月常務理事会報告

ケ　国体後催県の準備状況について
・長崎：抽選会26．9．7㈰15時で申請中。実施要項（案）提出10/11迄
・岩手：正式決定（7/24）。9/6に正規視察終了
・福井：正式決定（7/24）、11/30

詳しくは ➡ www.jma-sangaku.or.jp

お問い合わせは

日本山岳協会 山岳共済会

事務委託：日本山岳協会山岳共済事務センター
月～金　10：00 ～ 17：00（土・日・祝日除く）

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707
TEL：03-5958-3396　FAX：03-5958-3397
E-mail：sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp
ＵＲＬ：http://sangakukyousai.com

に正規視察予定（池田町）
・茨城：11/18に正規視察予定（鉾田市）
⑶遭難対策委員会
9月25日㈬　出席者9名
ア　日中韓技術交流研修会の報告
イ　積雪期レスキュー講習会について
・ＪＡＮとの共催について
・雪崩アンケートの実施ほか経費について
ウ　ロープ強度試験の報告
・セカンド確保時にかかる負荷について測定
エ　新型探査機について
・オースジャパンの試作機（改良品）について
オ　平成26年度日中韓技術交流研修会について
・群馬県谷川岳周辺での開催を予定
カ　ＵＩＡＡ登山委員会の日本開催について
⑷指導委員会
10月7日㈪　出席者11名
ア　9月常任委員会議事録確認
イ　修了証の発行報告
ウ　ハイキングリーダー検討会について
・12/7~8、神奈川県山岳スポーツセンター
エ　平成26年度講師養成講習会について
オ　ＳＣ指導者講習会（山口）のキャンセル料の件について
カ　登攀技術研修会の準備について
・10/12～13、岩手
キ　ＳＣ指導者講習会について
・福岡、沖縄、北海道、神奈川、鳥取での開催について
ケ　指導員認定申請
・ＳＣ指導員（宮城）：渡辺勲、竹田知広、榊田晴夫、佐藤祥満、岩山恭賀、佐藤優哉、岡崎友昭、浅沼潔江、鈴木牧雄、菅原麻衣子、山田雅之、巽篤司、本田和恵，以上13名承認
・ＳＣ主任検定員（神奈川）：山本和幸、鈴木正之、以上2名承認
⑸国際委員会
10月8日㈫　出席者10名
ア　ＵＡＡＡ創立20周年記念登山について
・主管：ＮＭＡ、時期：2014年4月、目標山：ムスタンの未踏峰（6,476m）
イ　第26回海外登山女性懇談会について
・12/3㈫　国立オリンピック記念青少年総合センター
・講師とテーマ及び準備について
ウ　海外登山奨励金制度の見直しについて
・6～11月、12月～5月の半年ごとの分割案について
エ　海外登山技術研究会について

2．その他の重要事項
（9月13日～10月8日）

［報　告］
⑴第4回日中韓技術交流研修会
9月13日㈮～20日㈮　於：中国青海省西寧市　町田、一本松常任委員、角田・毛呂群馬岳連遭対委
⑵「山岳自然保護の集い・中央大会」
9月14日㈯～16日㈷　於：埼玉・小川げんきプラザ　神﨑会長、森下常務理事、石倉委員長
⑶2020年五輪開催都市決定報告会
9月17日㈫　於：京王プラザホテル　神﨑会長、尾形専務理事
⑷第2回富士山利用者負担専門委員会
9月25日㈬　於：都道府県会館　尾形専務理事
⑸「山の日」制定協議会
9月26日㈭　於：日本山岳ガイド協会　尾形専務理事
⑹山岳7団体自然環境連絡会
9月27日㈮　於：労山事務所　石倉委員長、徳永常任委員
⑺平成25年度中高年安全登山指導者講習会（東部地区）　9月27日㈮～29日㈰　於：愛知県民の森・宇連山系　神﨑会長、仙石常務理事

寄贈図書

CD	エイベックス・エンタテイメント㈱	「LIFE IS MOUNTAIN」
寄贈本	ＵＩＡＡ	「Alpine Skills：Sumer」
雑誌	Outdoorjournal	「The OUTDOOR Journal」2013 SUMMER
	東京新聞出版社	「岳人」No.797 2013.11
	山と渓谷社	「山と渓谷」No.943 2013.11
	山と溪谷社	「CLIMBLING joy」No.11
会報	神奈川県山岳連盟	「ときわ木」162号 2013秋
	横浜山岳会	「山」976号 2013年10月
	(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」2013.10　No.426
	(公財)京都府体育協会	「京都府体協時報」No.113
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」9月号 第403号
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第556号
	(公財)日本体育協会	「体協スポーツニュース/フェアプレイニュース」2013年9月30日号
	(公財)日本山岳会自然保護委員会	「木の目 草の芽」第106号
	(一財)熊本国際観光コンベンション協会	「くまもと観光コンベンションニュース」2013秋号
	国立スポーツ科学センター	「JISS News Letter」Vol.25
	(公財)全国ボウリング協会	「JBC news」第503号
	ＵＩＡＡ	「Annuai Report 2013」
	中華民国健行登山會	「中華登山」165 2013.07
	ＳＡＣ	「DIE ALPEN」SEP/OKT 2013
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.288
	(一財)福岡コンベンションセンター	「FCCnews」48 2013.10-2014.3
	高校生新聞社	「高校生新聞」10/10-11/9 第210号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.465 2013.11
	大阪府山岳連盟	「山岳おおさか」No.198
	(公財)日本体育協会	「体協フェアプレイポスター・体協スポーツニュース」10月15日号・体協フェアプレイニュース
	日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト	「HAT-J NEWS」No.91 2013年10月20日
	(公社)日本山岳会	「山」No.821 2013年10月号
	大阪府立体育会館	「季刊 府立体育会館」No.106
	東京野歩路会	「山嶺」No.1004
	埼玉県山岳連盟	「埼玉岳連」第46号
	Korean Alpine Federtion	「大山聯」Vol. 178 2013 October
	おいらく山岳会	「山行手帖」No.647 '13.11
	愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第405号
	やまびこ山想会	「やまびこ」第150号
	日本山岳写真協会	「日本山岳写真協会ニュース」10月号 第404号
	(公社)国土緑化推進機構	「ぐりーんもあ」2013 Vol. 63
	福岡山の会	「せふり」25年11月　No.359
	(公社)日本パワーリフティング協会	「JPA時報」第58号

NPO法人 北丹沢山岳センター
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
蛭ケ岳山荘　TEL:090-2252-3203（衛星電話）
神の川ヒュッテ　TEL:042-787-2276
和田峠「峠の茶屋」　TEL:042-687-2882
理事長・代表　杉本憲昭

NPO法人 北丹沢山岳センター
事務局　〒252-0184　神奈川県相模原市緑区小渕1545-1
TEL 042-687-4011　FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp
○ 北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
○ 陣馬山トレイルレース実行委員会
○ 八重山トレイルレース実行委員会
○ 東丹沢宮ヶ瀬トレイルレース実行委員会
大会々長　杉本憲昭

⑻第68回東京国体総合開会式
　9月28日㈯　於：味の素スタジアム　佐藤副会長
⑼ＵＡＡＡ総会
　9月28日㈯～10月2日㈬
　於：パキスタン・イスラマバート
　神﨑会長、小野寺常務理事
⑽ＵＩＡＡ総会
　10月3日㈭～7日㈪　於：スイス・ポントレジーナ　八木原副会長、小野寺常務理事
⑾第68回東京国体役員全体会議・監督会議　10月3日㈭　於：東久留米市スポーツセンター　神﨑会長、國松・佐藤副会長、森下常務理事、高山、北山、山本委員長
⑿第68回東京国体山岳競技大会
　10月4日㈮～6日㈰　於：東久留米市スポーツセンター　神﨑会長、國松・佐藤副会長、森下常務理事、高山、北山、山本委員長
⒀スイス山岳会創立150周年記念式典・祝賀会　10月4日㈮　於：スイス・ポントレジーナ　八木原副会長、小野寺常務理事
⒁国立登山研修所「登山研修」編集委員会　10月7日㈪　於：国立競技場会議室　尾形専務理事
⒂ジャムリン・テンジン・シェルパ氏来日歓迎会　10月7日㈪　於：新橋第1ホテル　神﨑会長、尾形専務理事、佐伯常任委員
⒃第56回オールスポーツマンゴルフ大会キャプテン会議
　10月9日㈬　於：岸記念体育会館　尾形専務理事

3．議　事

⑴平成25年度9月常務理事会議事録の承認について（承認）
⑵平成25年度第3回理事会議案について（提案の議案、報告事項に一部加筆で承認）
⑶「平成25年度ヤマハ発動機スポーツ振興財団・スポーツチャレンジ賞」候補者推薦について（締切りまでに事務局で取り纏めて申請することで承認）
⑷平成25年度少年少女登山教室交付申請の承認について（鹿児島、滋賀、京都、高知、群馬、東京の6件の申請を承認）
⑸2013毎日スポーツ人賞の候補者推薦について（締切りまでに事務局で取り纏めて申請することで承認）
⑹報告事項
ア　会計月次
イ　群馬県谷川岳遭難防止条例違反について
ウ　遭対委の雪崩アンケートについて
エ　ＵＡＡＡ総会、ＵＩＡＡ総会報告
オ　山岳共済会のモンベル・コラボカードについて
カ　第68回東京国体山岳競技報告
キ　ＩＦＳＣ大会主催者ガイドブック2014年版の邦訳について
ク　全国「山の日」制定協議会発起人について
ケ　『登山月報』への「ブロック通信」掲載について
コ　JFNジャパンエフエムネットワーク「YAJIKITA on the road」の取材協力について
サ　ワーキング・グループの経過報告のまとめについて

4．役員等の派遣について

⑴山岳7団体自然環境連絡会　10月31日㈭　於：労山事務所　石倉委員長、徳永常任委員
⑵ＵＩＡＡ登山委員会　11月6日㈬～10日㈰　於：ベルギー・ブリュッセル　青山常任委員
⑶SC指導者養成講習会　11月9日㈯～10日㈰　於：埼玉・加須市　瀧本常務理事
⑷平成25年度第3回理事会
　11月17日㈰　於：日本青年館302号室　神﨑会長ほか
⑸第56回オールスポーツマンゴルフ大会　11月18日㈪
　於：久邇CC　坂口顧問ほか
⑹茨城国体正規視察　11月18日㈪
　於：茨城・鉾田市　高山委員長
⑺福井国体正規視察　11月30日㈯
　於：福井・池田町　高山委員長
⑻近畿地区山岳連盟総会　11月30日㈯～12月1日㈰　於：（未定）
　佐藤副会長
⑼第26回海外登山女性懇談会
　12月3日㈫　於：国立オリンピック記念青少年総合センター　神﨑会長、八木原副会長、澤田委員長

5．後援、協賛等の依頼について

ア　「第4回日本山岳遺産サミット」後援名義（日本山岳遺産基金主催）（承認）
イ　日本の山岳シリーズ記念切手発行記念登山「青葉山（若狭富士）と泰澄大師が創建、中山寺を訪ねる」後援名義（福井県山岳連盟主催）（承認）
ウ　クライミング競技会「第3回アンコールカップ」後援名義（アンコール・クライマーズ・ネット主催）（承認）

6．報　告

⑴自然保護指導員の承認　　な　し
⑵指導員の認定承認
①ＳＣ指導員
　渡辺勲、竹田知広、榊田晴夫、佐藤祥満、岩山恭賀、佐藤優哉、岡崎友昭、浅沼潔江、鈴木牧雄、菅原麻衣子、山田雅之、巽篤司、本田和恵、以上13名（承認）
②ＳＣ主任検定員
　山本和幸、鈴木正之、以上2名（承認）

編集後記

10月の連休に雨飾高原へファミリーキャンプに出かけた。紅葉は1週間程早かった。日本百名山の雨飾山は、この時期大勢の登山客で大変混雑していた。管理人の話では、10月週末の登山者数は1日400人位、頂上付近は渋滞で登頂を断念して下山する人も。又、登山道からのはみ出し、ゴミの投棄、指定地以外の無断設営など、登山者のマナーが問題となっているようだ。雨飾山に限らず登山者が集中する山域・時期は、オーバーユースで何らかの規制がかかる前に「マナーの向上」が必要だ。

（広報担当　水島彰治）

登山月報　第536号
定　価　100円（送料別）
予約年間　1,200円（送料共）
昭和45年12月12日
第三種郵便物認可
（毎月1回15日発行）
発行日　平成25年11月15日
発行者　東京都渋谷区神南1の1の1
岸記念体育会館内
公益社団法人日本山岳協会
電　話　03－3481－2396
ＦＡＸ　03－3481－2395